[illegible]

大野氏子詠草大小十二冊の内

七

洋学文庫
文庫8
A 180
7

む年佳ちち

一年のわつらひをとゝのへてもなつのくしれ見のらぬは
おもひたえてもるいてのしるしやれなるほのはのもとゑは
ほとゝきすへの麗もおのへつゝやきまきくまねをまつれ
出もつゝしなき社なく来りかれなくさのふとうつゝうて
かやうのさいかふかゝれけをやうしも青のなきおもひそ侍る

風芝露生

谷川のおとも絶ゆるしものかねより霰もなく来りかへりて
東山しらぬへてもちらのはしも来露清くもなく来りてしかれ

春水

昭和26年12月10日 寄贈 大槻茂雄氏

よの人は何のこゝろかくみ川の水ならなくにゆくへしらまし
梅のたちまちにほふ手の影の若宮の清水を白く見てり

東風吹入窓

東されは風のたよりにやまさきねを花のかをりもきほしてあり
朝日影窓まてにほふかをりさへ梅のかさねて風そしらする

遠山霞

遠山は霞ならしにかへて花のほとさへなかく見えけり
柑生れのむかしの春はやまのしもねにかたは霞くらわたる

田家宿

かたらひて身にもしむ花の香に
里の名にこそ花をみのつきて計るゆきの郷にすゝむ

里の名にしなれはなれのきみの宿の梅のゆへやのうらむる

青柳風静

ゆきもりは花をもさそね東風をおのかと待なる青柳のいと
ゆらしも花の後のいてにたは東風は梅の糸をなひかせてをと
横霞やさはなれつゝ青柳の糸のゆくへに風をうらむる
梅のこゝろさへかねたらの花の光なからのいかゝ青柳のいと
柳かけのかへらぬ花をゆかしたる梅の香なからも梅をてらす
おなしこのひらいふるきなる宿の梅なるし
かゝみなる花の心をおしらせゆかしらひきはこの花にて
春雨は静かにおもひ見えては風さへかけてたちましかる

ゆく年はいそくものゝ春日はいさゝかとめて春の初哉

松契多春

子日する小松の原にあらはれし千年の春をかそへやるよし

君かよりまさりし鶯の二声そ聞

鶯のこゑ

鶯のこゑは雪にうちそへて鶯の声いのちを[illegible]りし時

鶯の声ゆかしくそいつもやまとは[illegible]の林をおもひて[illegible]

澤若菜

雪消て野沢つきのゝ[illegible]のれと出て若菜をつみしより

野沢の若菜をつみて春は鶯[illegible]

春夜

ふけゆけは月もかすみて[illegible]梅のかほる春の[illegible]

[illegible]の夜の心[illegible]をつちはかすむ春の夜半の[illegible]

それはいはぬ鶯の声[illegible]

いきもはぬ[illegible]鶯のきのふはおもひあらはしつる

雪中梅

[illegible]の[illegible]の梅しのふ心[illegible]春にほふ[illegible]

春雨晴

春雨はやみきぬれにてはるゝ[illegible]ふりつもる[illegible]の梅の[illegible]

雨後梅

山さとの西川の岸におもひつゝその梅をみとはにしら梅のさかりなり

おほきみのゆきまさらぬや名のうへの西岐のにほひは深きかな

山路梅

和歌山梅原のにほひやる花にさそはれ梅に心をよせつゝ物のあはれさえ

あしひきの山路をゆく木の下に西枝ゆかしの香をよするゆきまの春

梅薫夜風

高きひとの青の文は袖のにほひとゝのへさよふけゆきの匠風

わかりきし人をまちわびの心地して風ふくの雨夜半の梅の香

同題

よもすがら一つの梅を見てさくらをも匂ひわびて梅の香のかり

鶯入梅来語 某の宗匠某

いにしへの心もしらずのゆくを香に待る日の光に花の色

うつりゆくの花さきそめてたよりある枝よりふる〳〵の花

同題 某 蓉園

春毎におもひの外になれにしの香梅の花の白妙となる

青梅のかほり咲つゝいとゞしきかとさえ見る雪の宿の春

梅薫袖 月会

しらでこそ来る人ならぬ袖にもにほひのこる梅の香

紅梅は人のうつる袖にかゝる心まであはれなりける

梅かゝをつゝみて袖も梅花のにほひくとこそ香もまよふさ
　　梅緑翁
たゝはやゆき梅のにほひそふ松のえをゝやのふ社なきを見へきと
　　康広
しるへつゝ春雨ふる光そねの香静なる夜寒ともたる哉
　　ある人
さそふえる春のあさ夜をあはれにこそ心ありて香をとゝめけむ
　　時宜
梅さえて露は春風あらしの風は袖さへかをる
薪葉ありふ春をそむく人のあはれ香はしのふ夜ふかき

雨中梅
今はらし空のけしきもかはりゆく雨さへ風もふきやむのに
梅のかを雨の夜ふけて軒ちかく春のあはれは知る人そしる
　　ある日
何となく心ありけるはるの雨春の夜ふかき香をそしのふ
春雨のふるにつけても梅か香のあはれもまさる夜はのしつけさ
　　露
梅しのふ春の心をつけそめて袖の露こそ香になりにけれ
　　春雨
むらさきたる衣の袖もしほれつゝ春雨そふる梅の香そする

光りはの庭をさかるゝしけにと能いへきやてまつの侍る

折梅贈人

香はなほ袖にかへるともあかすやてゆかし人もなきに咲
つれなくもおりつる梅のはな香をそへてたふねのさかさね

江上春月

なかめしきものゝかひある人もなしおほろにかすみてはるの月
住しいの入江の舟のおもかけとたち見つるかすみの中つにほ住き

山家春竹

竹わかきわか霞む山家のこすゑの小竹ゝきにふらん春
此の春はあまきる計我山の竹茸のたちやしえりけり

霞去

立切忘りかいの林をはなちおほて霞ねてふかくふ春
かすりの帳かいまつしてふかくあまつるにしての名香

空様

綿雁の名残とては空を隣る計しにかすみる初音
光りはし心ちとをはまの衣をなかにみをはとゆくへ
まねしの夜の林空にかかり光りはの空深く梅てふ侍る

閑夜雁枕

あらし夜の梢につきふく風の心つくむき夜半のよ然こり
いまさして今はなる人のこゝちて霞をわかやうにみ然に香

咲ぬれとうつはあらしのかけのみや花にちりかふ雪の山かけ

和千稲荷詣

まに路のふみもやらさていなり山けふのまつりに人まいりつゝ

いなり山はしめの心しるへとてゆきかふみちをたのむ宿

雨後野花

春雨のあとの野原のはらはら小草まくしてよその花のにほひ見る

鶯飲花香　雅陸ところ

神うつくへき
すゝひきをもてあさはちをうかへつゝ花の露をも鶯のこゑ

春和麻鶴園翁

谷の戸をいてゝやなるゝ鶯のこゑをさかりに花のこゑをいて

かをさへにちらす心そ花に春風のみえて

野花竹　同会翁

野の宿をまた切斗あひみしの露をたとりてそ

ゆきかひのたよりとなるやかくれ家の

なかめやる花のすかたをみるにつけ

その竹のつゆをかれてはなれぬる

志賀山越

まつしらぬしはしもやすらひに

垣根竹

雲雀なく春の野わけのかきねのまつしけく

呉竹のつゆをもきは袖のうへはさこそうちふる人の涙なりけり

呉竹のはかなくもなる袖のうへは涙をそふる人たのみかな

呉竹　呉竹　古の[illegible]

たわむとも雪におもしろさくらにつゆのはしゆきのしたる

おきふる雪をはらはて呉竹のうちふしなからふちもしらす

葉かはらぬみとりのちりもつもるなり[illegible]のこゑ

松間嵐　前[illegible]

なほたえぬ松のねのかせをききつとおもはれ嵐に

かくれなきさまはまつのをしとたちふる木のはらふものさそふか

松風のしらへさしたる春のねにきこゆるまつのみね

おきのはにわたるよりやらぬ山まのたえつかたになる松かね

雪中竹　後撰

呉竹のねにうつらすゆる袖のうへは涙まてしらる人たのみかな

山寺帰雁　[illegible]

かすみにたる山路のはれの春をかへりて帰る雁の

きゝはしらの鐘しつかにきこえぬおとはかなしきこゑのするかな

炭竈　[illegible]

梅ちる炭竈のけふりたえて絶間に年ふるなる

炭竈のほそくのこるよはのけふりにもはれかへる

社頭松

雨ふれは神のいかきにゆふかけてあやなく見ゆる春の夕くれ

為家卿

いさよひの月やあらはに山の端にはるかに見ゆる白雲の峯

山家 日野大納言

しくれつゝ紅葉の色の川のきしに秋やとまりてのこるもみちの

樒おくらむ花つまくる我庵をあはれとて見る山さとの月

住人の衣うつなる声きゝてなかめやる月の影のさゆる

信実朝臣

心ありてたつねこしもとこそあれ人の心のさためなきかな

哀しれる人のむかしのあとゝめて見ぬ人の世の心なるらむ

為氏卿 思ひ情なく

かくらぬ俺の心も空の霞をさそひのこるいさよひの月

花下晩雰

桜さく人のこゝろもてなくさめて春の夕くれの月の白雲

寂蓮

忘れぬの心の月にはれやらぬ人をまつよの空の袖のしもかな

又

何事もなしと思ひやるあかねさす月のさやけさ

桃さくらなにかへるさかの山のかすみにまかふ花のまくら

西行法師

花見るし山路の奥[illegible]さくら咲梶の本
山路の遠くおもひて行[illegible]のもとの[illegible]
露[illegible]
旅人の[illegible]いとゝしくは[illegible]
夕陽[illegible]
竹の[illegible]
夕[illegible]の[illegible]
丹水[illegible]
丹人[illegible]
[illegible]庭[illegible]

庭ちかき松[illegible]月の[illegible]
翠雲[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
風も松ねにかよひて[illegible]
乱世[illegible]の[illegible]
左雅[illegible]
桜[illegible]
枝[illegible]山[illegible]
さくら[illegible]の花

百首

西園寺實兼

あさ露し山風の庵にさゝいれつきいつはまことはなでゝ

長嘯

ひつきゝえむれなん蚊のいさしかちあそふるまれにおきの中ゆる

菊代をいらし西行しる朱術のうきはいまおもひまさる雨前

之丹素

はるこゐるあはれをまちやしきねしなるうつる本ねさき

おもひの夜も行きいくそちまちふねまは捨ねくさいふし本ねる

社頭平安

はまそへのなとさるしきさかは川なの御影をおもしろきのみ
謌の声もきこゆなく末しらもさす雨井のをみ社なではしらり

新竹

かきねはうへ前いのこの木のはさしはらくらて生こえし家かれ
竹の子もしそ木とらをそをまえてわらはそしきて末はる

里新樹

わか枝は竹の人社小さなしてきさゆるゝ家さ之まゝこ梢すゝ涼く
木の葉にも里への葉のわつかはなとさなる計りわか枝さしらり

雨井未定

しくれつる峯の雲まをてらしつゝ雨の名残のさやけき月かな

秋枕さは庭の荻はら露ちりて夕にはこゝろしてしのふ秋の夜

山家紅葉

我山の紅葉は比はぬ錦なれやこゝろつくして来る人もなし

山深み紅葉の梢とて紅葉の雲かゝる庵はふもとのいも本

雪中早梅

こゆしもをはは梅かしたはしたみ花も山もとの梅のはるさきて色

たなはたやの秋そへてなかきもて出ひるふしみさして咲わたる花

旅結露

契りて山中のこの人はかへりしをもなをまちつゝわか身かな

わかれはあれなみをいくたひも人やりならぬ結ひそめし味

雨中早苗

いとまなき雨におりたちそのまゝにかはくまもなき早苗とるなり

おりたちのさなへもとるたひにしもかへさもかくさまにかへりさるかな

河邊螢

いさ山の梢にかはし静かなる雨にならぬ夏の夜のもの

河のかはかつしの中にしほれたるこのまをもつ山かけのかけ

池邊菖蒲

あやめさく池のみきはにまつはるゝあやめの根のたえぬつらさを

池澤にねをなかめつゝ菖蒲草引つきそてらさるかな

梔橘

なつかしき昔の人のおもかげをとゞめしものは花のかをり

大江為清

梅の花ちりにし後のたちばなの花をぞ人の袖の香ぞする

宗尹朝臣

花ちりてのちのかぜに袖ふれて匂ひのこれる花たちばなの香

忠度朝臣

おもひいでの人をしのぶの軒ちかき花たちばなの香ぞにほひける

雅忠朝臣

たちばなのかをるあたりのうたゝねは夢もむかしの袖の香ぞする

政範

忘れじとむかしのことをしのぶにはまた橘の花ぞかほれる

冬行朝臣

ちる花の香をのこしたる橘のそのかみの事もしのばるゝかな

英房公

たちばなの花ちりかゝる木の下は夏もむかしの香ぞする

為秀朝臣

橘のかをるゆふべのまどちかみ人をしのぶのこゝろのみして

知家卿

たちばなのにほふあたりの夕風にむかしの人の袖ぞかをれる

うしの夜の鐘の聲をきくまゝにまことさへひとりかな

すみそいふは我世のこりける鐘の聲をいつはりにのみきくまゝに

うしろの峯のまつをおもはしたらいふ時もおもひつゝそ見つゝき

捨てもいとはれはるゝかたの聲そにおもかけてしらぬ夢雲

郭公未遇

思ひねの夢にみえたるおもかけのおもき山はさらにかなしき

初郭公

初音をまちこそわひしとおもひつゝきゝそめしよりなけかるゝかな

なき人のかげのみのこる山にのみ初音の夢やゆめにきくかな

思ひ出る時雨

おもひ出の梢のゆふきぬおもひ出のくもりたる空に雨のこりて

新樹隔雨

夏木立雨中の雲ゆふ夕月夜おもひもねむよりしのはれぬる

早郭公

初音ともしらぬおもひの夢のまねきにきくそおもかけそれおもひやる

待郭公

おとにきく山ほとゝきす中空にまちこそいまこそ中よりもおもひの宿

雨中菖蒲

あやめ草おりこそ夜はも深山の行末やかくあられきね

庵五月雨

河霧

船つなく河原の柳おもかけてうつりてさとかすむ霧哉

暁霧

なのミかはゆくをちかたのはやせ川夜をこめて霧の世の霧哉

雨後夜月

あま雲のたえまの月夜ふけて影すゝしくそ見えける

野夕陳夜

出てゆく秋の夜すから野のみちをやとりて露をわけつゝゆく

名不夜月

秋の山はるかにわたるゆふ月の影に神の露をおもはる

夕霧川

河辺にのこるいさゝ川浪の霧にうかぶ舟のかげやさびしき

浦松風

なにはえの浦かぜやゝ吹く夜の松風は浦のしほ風

望深射

夜のまつりつゝ月のひかりにみたるゝさ夜のしらべかな

夕立雲

夕立の雲わけてそら行くしらくもの山の峯まで

これやこの道のゆくての里をたにゆふひかけつゝ

納涼

涼しさの河原ちかき夜の更ぬれば月と共にそいぬる
宵の間と思ひねつゝしも比翼しきりに涼しまさりけり
　　為村卿　同会同題
あらしの峰にさわく山風は月影に涼しくてさらに秋のころ
なき河のあらしの小橋の露深くしけるもさらに人もなし
　　千蔭一首
いさゝかにせきやる水の涼しさに人はかへるやの夕暮
松の木の陰の木の下涼しき夕ぐれ一首は入待ちたらしの夕暮
　　浦文件雨

松風のさやかに涼しき夜は更けて閑の木陰に夏しらぬ宿の空
浦人の手引の浦の下かけに涼しさをまさらぬ夏の空
　　資芳朝臣
岩井ふかく涼しき夏の木の下かげは今朝より涼しき
夏の夕は夜更けてあゆみて一夜の露の命なりけり
　　公澄卿
御はらひの
河当もしけるなの川しもと露とちる人の夏をしるこの夜
　　実業卿
夕ぐれの手つゝき宵の月影さやかにつきて入るこの夜
　　雨俊卿

あらし吹のしのはらの玉ゆらりゆきさえ今宵ハおもる夜なり

冬夜月

冬の夜の色梅の月とみさえてこゝろあさきかなしきこゝろとやもあ

あはれいかにさえしとめ冬ゆさるこゝろのやる月夜

さひしさもむちつるる冬のなからかはれ月のな

寒花

いまにあらはゆる梅ねのむめちりて月とをまちわひ

ある冬さい

なちまはらのやまとなくのむめ梅ちりつ月の雪のな

冬歌花

あはれむかしとなしよ山家のさむさにかこよひとなよ

はふきのむらむちへとやわるまふる冬のゆ月とをゆよ冬を

おもひ出らわれりけふまゐのさとさいさよにゐる夜

遠村桜

雨夜花橘

夏はのきねのあかつきの雨ゆいめる露ゆさのとる葎

宿にみきるをもいふねまの月になのる雨夜ハめくしや

橘子名し

露月のあはのかくをゆめるゆらけることゆゐるまのち

橘

らしたゝくわたるゝ蛍かりくれにかに檜皮の屋根わたしこゝ床

夕月雨晴

はるゝ夜の清まつ月をまちえてさしわたる雲間の月も涼しかりけり

夜月涼

待ゐれしいねの秋の夜をのこゝのかゝる月にもあつさをのらふ俤る哉

うちいでてさとのもかゝる月にうつろふ風に涼しき哉

深夜水鶏

槙の戸もあくるもなきつま戸口にさしてたゝく人の水鶏の

しらさしく我つまの住ならみすゝしきふる水鶏哉

あはれなるちかきにたゝく水鶏をゆめならぬともなし

お室

まちえたらへきにねもしのふもとお室ちかき月を見しは柱やさき

なかなかとふきたれつ秋お室山まくらにまさて涼しかりけり

桜井寺

我くらのきもあらはもゆかるる萩かへつもねつさしらたゝきの涼し

はなしをゆくて桜の枝さしかしはら大宮に木たるとふかくさ

あらの宮の夜のさゆきあかれはんとやりひと衣くまつるる哉

水無瀬

きゝなるゝ木のやまさへみえて人すむとも空にしるへのこゝろ

実方朝臣

春日の宮移りし宮もあめて立隠しえても恋ある哉

貫之

あかるなをたのしくしえてこそれつる心の空をまかせや

府

立のわつるおちの併存さしてたえ渡さまえしまゝ風のをさむ

坂上是則

立ひのかた空にあるつゝの錦を尾上に渡ちくなくさこの存の哉

蛍火のをゆる光さしつゝのなこのこへをたえつゝなきたえ渡し

文年十二月岩井の井の水をくみて
稲の井の名にしおふ稲霊の水をも汲に岩根子水を
稲ぬりて酒にして
御酒のあまりとられハ末座の客ハ酔しためそのうち水利
ある歌座にてよめる
和稲の早苗この露の心もちよしたるをとねらるの玉ハ淀ん
両家に和稲
寿にうし稲のこゝろの種を生ませつまハ稲ハ来まして水あまる
稲のやのまつりはなやかのまたあのやたらくまハ稲はまいらぬ
稲人まけ

たなはたの秋くるやのゝねなきまちハちよろのらてちつふ

初秋雨

なれ衣るまいくよしてかゝる竹しまゝゆかしハ雨の宿はうす

又月ありゆかしうつる哉栽をこしして

遠空

かゝるうゝにしさいに庭の中ありさい雨の跡をみくしの峰

まつえしをのえしてあまるり秋はそのまゝ青くして

しきりくもまてあかねる秋は人となりし末ちかくなりのまつらん

七月ちしやつのあまるかたきこのうちはしてゆく

ちしの声をみゆく

みなりにみのもゆゝ中ゆきえぬいろをはやくかしの声

初秋夕

おもひくハ夕露深き月くもりハいなくしねそのうち袖のかゝるハ

消ゆるかゝるとこしハ鈴虫の夕露のかゝるせくのゝ末なる

夕露のかゝる草の八千竹しちねはそかる秋くさなり

初聞虫

まつをひりはえさえひしに中絶むかし秋深き夜半の虫の音

かよのふ露ぞのゆかりまちちら篠をかし七はなきさちる秋くさにこそ

初聞雁

一声ちる桐ぞ秋のなきくたえてとかすして来しね方にその使なれ

梅の花はつ[illegible]の名[illegible]なりけり

藤為頼

[illegible]はるゝ[illegible]梅の[illegible]梅[illegible]

おなしねの[illegible]梅の[illegible]

平祐挙

あきの[illegible]

梅[illegible]

[illegible]の庭[illegible]梅[illegible]

和泉式部

[illegible]梅の[illegible]

山家ニ梅

[illegible]山[illegible]梅の[illegible]

平兼盛

[illegible]梅[illegible]

藤高遠

[illegible]梅[illegible]梅の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]人の[illegible]の[illegible]の[illegible]たる[illegible]

為右卿

こゑ〳〵のたえまに秋を待かほにまねくもあはれ尾花か末

夕川萱

さも身にしむはあはれかつらし夕露のおくる秋をしのふころかや

葉房

（むかしの）
おのつからそよくの風をきけはしらぬる葉さへ色に見えけれ

宗之朝臣

ゆふ雲のたえまのかゝやきの夕影にちかきこのあはれなる

山本朝臣

法の師をつくさしにほふ山寺のいりあひのかねの音のあはれ

きゝもうらのもと

（ちとせ）
山路のもとは秋待えしに仮ねするさまつりしのちの秋

緒料卿

法のねしは来りて今ははや水竹のもとの秋やいくらね

家福卿

山さとはあつくまをしはしまつくしつきに月まちに吹あり

葉房

秋の夜はうつりもみちね袖の袖つゝさまによそに秋くる

宗衣重

家〳〵あつくさの露にたゝしをゝひねの袖にちらしかゝる

竹秋風

かりそめにさしもいつしか秋風をたえすかりけりのおとしきこゆる

田家秋風

小山田のいねもる秋の窓はなかなかすゝしかるならし

深夜虫

ふしなれぬるよはさらはしむしのねは秋の夜のこゑよりまさる

河辺虫

夏川のたえにし露も秋来ては虫のねさへもなかれけり

月前荻

月のいる山の端ちかき荻の葉を心あるかにまねく尾花か

叢秋萩

秋のそらしくれ衣かる我山の萩か枝はあまりて秋そすみけり

秋夕雲

なにもなくなかなかよほとに夕暮の花のあいの夕ほのねつゝ

稲妻

さは人の心のあさくかくる稲妻のなかなるいなつま

見月

わすれしなら我もいはんこの秋の月をみなれし

隣家月

秋ことにたえぬ人をまつ月影も山の端のにほふちかきまて

月前述懐

月こそはむかしなからのちきりならめおなしよにふる身そかはりゆく

野路秋夕

旅人のつゆしらやのこゝろねたるゝ夜ともかはらぬかたのねよりそ

故郷秋

秋萩にうつる山路の袖のうへに光もさしそふ秋のよの月

かやかこの故郷のあきのつゆとりてなを光おなし月かけ

深秋虫鳴

かれかれのちはらにかゝる露のうへに虫のねさへものこるまきかな

はつかしきあきののわけをしもかれそのなかに虫の声

寒夜月

かたしきの袖のこほりにやとりてもさえまさりゆくふくる夜の月

山寒くおもひかへすもあたら夜の月影をしきの袖の空

秋之秋風

秋の夜は月のかけさへ庭のおもに吹そふかせのたえまなき声

ふきおとすたえまも見えぬ秋風のしらつゆすらもなき

草路月

おきふしもまたあかぬ秋のおもかけの月にやとれる露のしら玉

秋の野の草葉につゆをうつしてもおもかけの月そひるしき

阿波守叔の菊計十五首所詠名不月

あらき旅寝の床つゆけき月影さへもうつろふ仮寝なり
末の山の月影さへ峰の雲の上まで出てこの夜
月　ちるをまちてよめる
秋の夜の月さへこほりてあり秋の夜の月のおもかげうつるを
いつはりなき世とはいへるは月の光なるべし
又あはれなるやまのはのさやけき月のかげはまたこの夜
けさはなほこがらしのふきつる月は我をもてなすらし
千里あまりの雲の中山にかかる心もしる月なる
此世をのがれて露さへてかくるゝ虫のねもかれ行く秋のさびしさ
うつろふ色やまなれて山の影のさびしさまさる秋のさびしさ
長き夜は月を見るまゝに老の身も涙にくもる夜はかなし
我宿の月はさやけくかゝる光のさやけさにまた月をみる
苔の下のこの一節をもちて月はくもりなき
月影はさやかにそらもさだかなる秋の夜はさやかなる月の光
かはらぬ月の光をうつしてかはらぬ秋の夜をあはれにおもふ
たか山の峰にかゝる雲のはれまより月をまちつゝ
秋もなほ我身ひとつをしるとても月を宿しつるかな
月影をうつしてふかき秋の夜の露をもかりてさえわたりけり

落葉月

おもひなほはるかなる落葉の月さえわたりけり

野州虫

秋はたゞおつる涙もをりしきを千草に身をと何なげくらん

鳴弱る虫の根はかれて千草の色はいくよわかれね覧

蟋蟀の露と我こそ秋はなかめ虫の音はなくさめや

初雁

秋霧いとまもあらず一行の雁の羽ねに雲ぞちりける

雁

棹の字を結びて身をも横たへて行末高き雲井雁金

朱遊雁

小倉の中も秋風おもはて宮鈔露おりしきはまた生たり

いつまではなれてかくと落葉のもとのふみやをしれもさ

蝉面寄の高生

秋風の旅の蘆をしく時雨ぬいかにし千草もいとあなた宿れる

うつ棹りいねおもかの宇治なみやまゐりおもやまさの湊と

空霧

蘆の葉も霧に打れたる舟かけ空にかすみはれぬ

山も谷のをいさきに身をかへて空とみえ霧ものすたる所

朝霧

雲のまの小ゆきのあらそう紅山の鳴いちひろかる

霧の空をいまたなつきの小鷹もちたまつりの野も秋空の

ある夜光る月をみて

松のみか心のくまもなかりけり月にむかひて何かなけかん

ちりのよにうきよの中のかひもなく照すとも月はたゝしらるゝを

霧中遠帆

朝霧のたちこめし方に舟人のおもひさためぬすみなる哉

夕秋露

いつとはよ秋とはいはし夕露のたまにしはかなき世にもある哉

夕露のおきてはきゆる一葉の稲はかなくも秋そたつなる

遠霧

みかのはら雲ゐる峯も霧のうちにおほへるさまにかくれしこと

あさかせに雲霧こえしあきのよはうき世なかなか小萩露ちる

風前虫

風さむき千種の露は玉ゆらし虫のねゆるくのへの草むら

あはれとはきゝもやすらむ虫ちらの哀のねさへ山ちかくして

夏夜之月

夏の夜のみしかきまゝのまゝにあかすてふなる月をまつかな

まつほとのしはしはまてとあかなくにふけぬるかな月をかすむ

遅之月

雨はるゝ庭のこすゑわかきそのの月影も松にかゝりて

このまもりの露玉やのこる夕まくれちりそかゝれる月の影

月前菊

霜ちらし秋はほとにも紅葉の香にほひて月影の
菊の花ゆかしかるにちる露ふかく霧たちまよふ秋のよの月
なかめつゝ又来る年も月はさらに菊の花の色

九月十三夜雨ふりけれは

このゆふへを名にしおふ宵をまつとも雨の心よりとやなくる
なかやうとしもなき人も秋の月ともにふくるふ宵のな

雨之後

又人のおもふる雨中のゆふ秋にもしる菊る霜にうかは
菊くてかをる山雨秋折の露の香の後には

小山田秋清あけてく大月といねの香はのをる後毎にる

裁菊

山さとに植るいねのまこの植へる菊の一もとやうつろはし
籬のうちに菊の色秋やつりて植てをやれ黄菊白菊

社頭秋風

かしこしと宮居に神のまつの色にあらし秋の風の色に秋
吉田河のせらに秋つかしも浪の音に吹秋の風を

暮秋月

極なる小野に秋風にかる霧こゆる秋の月は[illegible]
こもりぬる夜のさはなる月にある人とわすれぬを

情秋似恋

袖のみはしるの名残おもかけて月も秋さて心のくまくまに

風前聞鶉

鶉啼声さへ寒き山里の声さへさそひてこの秋もあきの

草のかけやふしのとこ風さえてつゆの声にも秋そ聞ゆる

山家暮秋

山住の心しる人なりし秋ね覚の袖もとまりてゆくらむ

まつ散る秋の日数はいまはのまへて山里もや霧立こそ

虫のねもよわりはてゆく秋のくれを山里なしあはれしのへそ

旅中暮秋

おもふ事ことおほかる心やまするはなくいつかは秋の暮と

遠山紅葉

心ありて千入にそめしかとおもふ霜も錦にうつす秋の山そ遠

光うしろしもまかきに秋をこそ人そ山よりもちかくもみゆる

秋心

いはぬまてその心に秋いたる物にいかに我うらみの年

心のうちも見えぬ海をもちかねて秋はおもふこそまたる

九月尽

よそにみてたちし露の色かはる秋に雲の

人かくしるしつかもたえぬ秋の名よりは

滝の川はやき流を人のとひくれは
滝の川わたらぬ先のしら浪の立て鳴まよへる

積露

しつかなるちらさ宮人のさしかへつ露やおく秋の夕露

名所擣衣

難波江の月にふけてたつ波のよるよるかへし衣うつなる

両家月

住のえの松のしつえをかけてみる月をしらかしふる

両家花

花かみの跡を来るの色をあはれしてもちの花はつひちちらすこの雨なり

名所擣衣

松かせのしくるる夜はのうきねのをさまれはなる衣うつなり

初冬時雨

かはらぬは我身ひとつの我ながらさ定めなきよのまことをは時雨にそしれ

神無月雲の色もうちつけにしくれそめたる山の木のはに

松中時雨

いはねの松の尾上より音さそひつゝ時雨をとつれて木のは時雨そ降る

おとなふ宮のさしたる月影のしはしもたえて時雨ふりきね

霜満落葉 月照亭題

霜さゆる夜半の嵐の吹まゝに人音おもふに落葉ふるなる

あはれとは霜にゆつりて落葉のゆくへしる人まれなりけり

新嘗祭 三種目

紅葉せは硯洗ひとそめる時のしるしとて散る木の葉の

紅ならてかゝる事なる中の小柿となりにちる木の葉哉

比形化流水の意限

冬深く小雨もちて風のふく比のおとこつくまくらり

かゝるこのくにまるは日かられは比のおもてはおつおかり

きゝ波は峰吉の浜つたひのあんおそれ比のつくろう

初冬霜

草の葉の露は霜とむすひとてちるゝ冬あるの

山里の木かくろれる寺さゝてはつらう霜しくの和霜

柳沢母時雨

河井おちいそれて旅まさる枕にあるさよしくれのな

たえまは空のちれるさゝの夜のまゝにもふゝしくれかな

遠色時雨 再会當座

空の雲のゆきゝるゝは小雲ゝの空しつましくれ降るゝ

ありしくれふきとろすに日の晴て遠り小田の様りはゝとみ

遠山のゆきまておくるものちぢはふゝしみるくれしくれのゝ

紅葉落葉 當座

おくやまのおまし落葉もちるもちらぬかとて散る紅葉

あらし山ちていそのかはらまれちらし風ゝまる木の落葉

時雨こともちまいちるゝれなるきねつゝ落葉ふくしきい深の山ゝも

冬河

よどみなくなかるゝ水の音すまつよく風たちてちる紅葉

橋上霜

うち渡る橋のさむさは風さえて宇治の柳橋霜さえにけり

植しを松(?)かねもたえ〳〵のちに河の音もしらねばあさ〳〵に(?)ふる霜

遠村雪

いつのまに舟(?)子(?)の家しろき雪ふる村の松にかゝるのなかに

霜かゝる村のおさのさとおもし雪なかにまつもみえず

枯葉帯霜

冬の葉のおもはまたいまる紅霜とたちつもるさとのかげ

冬葉(?)もゆふぐれさむき初霜は木末をとおもひしふかば

遠山初雪

なかしの風まの松の山かげの初雪やふかきにみえてしろき峰

遠山にあかつきてし初雪や紅葉もちらしさえし白峯見

河冬月

このねのふしる月にをねるふねかしさゆる冬の夜のつま

かねるをのおもひ(?)つるまにさえて河のこほりに月ぞさえける

枯葉帯霜

冬川のなかにねはなく紅霜はふるや葉もよつらしは見

枕上聞霰 河原貞右衛(?)

雲はれて[illegible]しもとけぬつきかけの[illegible]すなり

山家冬静 家の兼題

冬いたるおとはきかねとよりきつはつ[illegible]

竹[illegible]人もこの[illegible]山[illegible]静なる[illegible]

[illegible]つるこの[illegible]のものさへ[illegible]のこゑ

[illegible]のこといさえひしき[illegible]としもなき[illegible]のみちと

旅宿寒夜 月次兼題 萩園兼題

[illegible]のそらのさむきもちやの衣かたしき人こそのおもひやらるれ

神祇 月次兼題

[illegible]人の神の心をとるのみならてあまねしをなくもならぬ[illegible]

早梅 家の当座

霜[illegible]ねのうちにとゆかれちる[illegible]のまとにほふなり

[illegible]に[illegible]なく梅さはなかり

絶恋 萩園当座

[illegible]のおもひにたえぬあのよそにかはりつらふのな

[illegible]つれなきうらみのまつもあらつ[illegible]

霜夜月 於清水の兼題

霜[illegible]ひかるつの[illegible]のよいかれのそてのみ

朱門[illegible]

[illegible]のまつもしきのたちの[illegible]

旅宿聞雁

たびねする小笹かくれの草まくら葉かぜにまよふかりのこゑかな

一条之室 水

名にしおふ月のかげにもたびねする身にはかなしき雁のこゑ哉

前中納言宗香

ふくるまでねぶらであかす旅枕ききてなれぬる雁のこゑかな

寄恋

我恋は

人の心をうつしても我身のうへにしらぬ人かな

我恋はおもひのほかにうきことのわすれがたきを人しらずして

寄夢恋

つれなきを心にかけしその夢のうちにもあはで人をこふらし

未逢恋

契りしはたのめしことのはかなさを我おもひねにいかにみるらん

そのかみのおもひの色もあさからでこひしきことのつもるなりけり

忘後恋

わすれじとたのめしことのはかなさに我こころなほたえぬおもひを

人のうへ我とおもへは恋しなん末のよそをもおもひしらなん

偲縁恋

思ひ捨てなは中々それと見えておもふ人にも我身をうき

増恋

伴さへもはや見さるゝ思ひそらの何てさへねものをやとふ

我身をうちおもふ心をも生ねはかしさていのちさへおもはゝ

あひおもふ

知るにもおもふあなたの心よりも恋しきのひとをかはりしつゝ

えていのちはいかゝいはさりしかいのちはいのちさへ

えきのおもひを見ぬへきにもあらんやはらかのなかにしつ

何恋

いまはたゝ思ひたえなてつらき我かはりこそ人ゝのおもひのとな

ねのうちつひしつ我は生かるかたにもかゝねへ人のつらさは

恋老人

将ありては我さゝのにおもひてをも思ひおもひさる恋のうち生

なかちさへしなひかゝ人をうらみて

いまの身かいかかれ恋しらんありとつらひなは我身をおもふ人を

恋わひいのちかし

我身をうちおもひこそつらきやうにも思ひさまかはんわかもおもふへき

被妨稀恋

たらちねのこゝろはしらるこのよにはたえてもいつのよまてかは
我ともの秋はいさよふ月かけはなかめのこのよなきをは
うちはらふ我ともふかき風わたる秋のよのくもる月の中そら
すみわたる秋のよはねてあきかはの月のかけにてちかくすむらん

信実朝臣

我ともの秋はいのちをすみてかへるへしいさなきまつつ

誓信法為

末なきも神のちかひしたまのまつはかへりもしらねはのきは

信成朝臣

天の原のかゝみの光ふかき秋のよるひる月影のみえ

権僧正為

むら雲のかゝるみねにはいるかたも今ていつての月のひかりを

為家

天の川秋のかせとやなひくらむ夜はに為家の月のかけかな

為氏

峰わたる木の葉もかせはふくよなよな人のなくかはあらしなれ

為兼

ふしの山秋のゆくへは為家る人をまてるかたを

和為

末のよにもみちはちらむやまのあきをよそにふらいの山さと

もろこしたらしらの人の歌は何にもならぬへきは才覚あるへくやうる

寄世路恋

難波江のあしのはかりもはかなくて何のいはて宿

神祇のさかき人のこころにて宿いろくにてこそ辞

大鏡恋

このよにと契りし人あのこねをも庸しそらしもわら緑

いかにもおもひさまいそのよは彫しるもゆるやしつらん

寄二語恋

見えもやらぬ人いかにとおもひよりそもやしく何にそ覚

はかなにやいとまへらぬ身のなきにつらそ恋さらし

寄柴木恋

柿並のもみちのみおもしてしそんとしもとのうらね

桜木のしらしけきのまねをかいにそもそも折ておもひさえ

しらしらし

あの京ねおもをましきにかたそふくんと我心をきつれをいはね

寄弓恋

あつさゆみいるいりさしやそいかにしたきに志とましきにも宿このな

ちかひ変し人のよるらそうちとるのかしくるるまをやそもつく徒ま

寄絶恋

死はりしをし人しいつもそれもおもうのつなおもをく今は来られなん

いはまくらのかくてやさは歎くらむなけきこそねくさき人ゆへにこそ

好忠

あらし吹よのおもひねにこそ今宵又おもひはてぬ歎くは

おほかたのよの人ならは我おもひを知らてやたえなん命さへ

兵衛督忠

ちかひたのかわるをみしに人は猶つれなきことを思しき

金吾忠

頼むかいなくもなかれしときねのまことの時は待しさかり

さためなくのみおもふつのかはとこそいふ人と我とをおもふかな

与忠

今はたゝ人のなさけをたのむかなあてなき人をうらみん

右兵忠

木にこそあれ我ちかひなきのみかはしをちかひしを

兩井忠

かこちてもかひなきことのはに忘れしと思ひたのみし関守

法性忠

このたひは我おもひをもらしなん人の世の中にあらはさん

深養父忠

いつはりのいつまてかはとおもへともかなしきことのはにまたれぬるを

信不忠

うたゝねの何もちかひもむなしくて夢の名残をかはる袖かな
思不言恋
おもふをいはでしのぶの山藤のたえぬおもひにいはでこそふれ
依恋難逢恋
恋しさのあふ日のなきをなげきつゝあふ瀬をまつにつらきこの身
待恋
いとゞなほ待ちしほどの夜は更けてかはらぬ月のかげぞさやけき
寄木恋
待ちいづる人の契のあさきにも人と見えけん松のなみだに
後会恋
あはでこそ恋しき月の影ながらあふを待ちつゝ何となくらん
来不逢恋
依稀恨恋
移りし人の心をまつことにあはれはかなき袖のなみだか
欲言恋
あはれのおもひのあはいたゞらぬ名をつゝみつゝいはでやみなん
待来恋
恋ぞくるしきあはれもあまたのくちしらしつれなきぞうき 四
寄雲恋

あすまでもわかりし夜半の鳥の音をきゝしわすれしもわびしきを

寄風恋

知らるゝ名をなげかむ後のうらみゝえ風をきける人をまつらむと

寄月恋

待よともいひしばかりに有明のさやかにのこる月をみるかな

寄雲恋

あはれなる人の心もあはれにしおもひさだめてねのみなく床

寄山恋

人恋る心そしらぬ山路のやましたかくもうちもちかき

後朝恋

小莚にしきてもおもひし面影は床の錦とたのみこしかな

人恋我

我恋も我にもしらぬなかとのみ人はなにとかしりてしる哉

歎名恋

こと人と恋するあふといふなはたてがねのうきよにちる名の末

寄葎恋

宿の中につれなきあとをまちわびてはかなきむすぶ葎の宿

寄蛛恋

きゝおもふくものいとよりかけるゝ糸よりもたえだえなりしを

おもはずもなくもかな

つらさこそ人のこの世をかぎりなれ思ひしさへまさりけり

いはでやはなさけの色のわすれ衣いかなる人やきてみえん

よしや又うらむものからいはじねて袖にしられん

恋ゆへの涙はおちね我までの袖もしらずの袖はぬれらん

恋

人ごゝろなれもはかなき秋風にさそはれ世にはあまりけん

たらちねの情も世にたえず恋ぬるをなほ恋わびて待つ

おのづからあはれとも見よ来ぬ人をまつのはしたのわかや

いひそめし人もかはらぬ昔の我ならば人もその心なし

かぎりとも思はゞおもねわすれなむ我をうらみて露ぞかゝる

恋夢同坊

枕にも人あはぬまに我宮のおくとも見えずあかつきのよしを

情人名恋

水くきのあとねたのわすれ衣も人のなげくはもらしこそすれ

久恋

恋しねの心をたのもしなし月のころまつことにともちわびる

忍ぶ着恋

ねられぬ夜いのちあるも人このなきのかりしをを恋をみね

寄虫恋

春もはやとはれしつらくなぐさむ人のつらさはかくてくちなむ

あつまちのさへちぎらむもちてふるかひもなきとおもへとおもふ

我恋はまことのおもしのなしはなかそふらでなきよしとは

変恋

さきをいとふもなをいひしちるとも我まれねばみ人ならむは

おもひやれ

あはれゆくさき涙のひとつめたちちねのそへねさもちになりて人まち

わる法の所のありさまひもなきかはひちぬ

たるしおもふらん

我もひきやられ心のありさまちたふたびてもおもひのしとも

いまそのねしはなつらんのいひかはする心のありさまし

さゝきものは袖しのつるしてよそにけたゝしてもなくは涙にて

あはれなき我と人ならしきてのすも袖とつひふるちかは

寄ち恋

我ものみえぬるは

家のなるもまたきと人のいひさらぬそでも我はあふなきと

ある我はちりなきとひまいひつらを我はなし恋しとるすのなきさ

うちの名人のこゝろとおもふいふはなるゝものかたち

我はそのことのなは我はとてもうきまにものなかしたる

うきなたつるなるはあれともわきと衣のちりにはひのそふのおもき

人のもとにこゝろのそていふやさまにいひさらぬとも我りしものを

ふか井なるあさはらのねさしも人ハいひさしても説
いはしもをの子も松おもひ人のこゝろにかはりなき
つれなきこの人をもおもひてもかきさそのねにまつの心ハ
人のあはれとも思ふ心ハ何のたくひかたらはまし
かへりてもおもひのふかきもまさるとおもひきるゝ心ハ
逢ことのかたきをたゝ猶まさにこの身のいふに何のゆゑそ
逢ひかたきもあるに逢事のつらさ
思ひつゝ心せきてさらにまさる
不逢恋
我恋はいつかはつるとしらねはちひさくておもひ社思へ

[illegible]美人

よちわたる梅のらてゆまをわのふかのまゆさへあてにこそみれけり

梅かりのふさつりふさへおもかるまにの白いふまもなし

かの手習したる絵とて

ほそくしの手習しさへのはかなきやゝ山の道と思ひまし

燈下美人

燈火のかけうつりこそわかるゝ手枕をまてらむ袖のぬるらん

半面美人

ちゑわたるねこのさまのまゆけあめりと心ふかくも何思ふらむ 遅筆

睡美人

玉藻の(藻の)うられおもふにゆくゑもしられね一すし心ある哉
あま人の住よにはきこゆるなり露おきて袖は
ひとりねは
春のふけゆくちりかゝる花をはふきあらしてそ何か残
紅葉京の月に照る秋の夜のこゝろ
立こゆる峯のしらくもの上にあらしの心やすまて露はおもしろき
おもふに大井川のこゝろ
大井川流てとしつもれるものをさかりにちるらして名残は有し
もみちのこゝろ
紅葉をさそふ嵐の音の山路ねもちねさそふと心ゆくお

春の松のこゝろ
けふみなるゝものさえをそらでのくまもなきはの峯
同し
山ふかきの石橋高はつたかへぬともしらてをちこちの
心つよねは宿の光にあかたる
つはしらふ人のさの緒宿へしらせし河への名残なく
住よしのこゝろ
住よし松なきねてのみ有ぬねさおとさかしつ
袖のこゝろ
秋高くゆきし白ふきとられいさくやさるおとおもいたるなか

河そひの松にあらはてこの夜嵐に
河そひの山のあはれ露しつ静まりかへりこの夜嵐の心
篠山にうつるこのはの
すみわたる静まりかへし嵐の音すみわたるこの夜の月
月の名をきく秋の心より
山かけにうつるみなの木枯にさそはれいとはれてこそ
淡路のうらの月のこほり渡るとも木より
みる月つれなくわたりてこのほとりにて秋の
たよりをとめのおもひかへしくわかりて
若宮のみちもりいくとかはらぬ人の言の葉にはつゆもなし

秋の山のつゆはらひて黄葉をかしうそふるかな
おもひやりけるは
梅咲はしろの宮路ちのまも雨はふりきて衣まても秋の
ちの山路はかゆるるのこりもおもきにあさましきかな
若宮のうの木山に散るを秋と思ふの京利
いと気なをいかに紅葉しくれしみ秋とおもふ心のかな
山深くの夕まくれのいとはかなくはかなき衣いとはれつきもとろ
雲のかよひ路ましらいさ接のこゝろにひかるさきてこそ
秋風のきよねはちりいはれぬちてつきねのしいつのほとし
や

松の中の木末に見えし一むらも雲のもみちのたくひなりけり

礒淵

うちむれて春の千鳥そわたるなる心を清く捨てしなん

某のよしのり

かやうりし春の夕への余波をのこす山さくらかな

たまものこころ

花さはの水のわたりに住む鶴の住やかれなきて錦おりけし

松川の菊はさの香を見ることにまよふ

おもむろ是なるか

ふるさとのはなさく風は吹川のこゝろの色をちらすなりけん

錦江の菊は雅の露よりも綾なるらし

いつのまにか植おきつらん庭の木のさかりの木のまをも

細川の菊はこゝろをちらしやる

深山の松のしたくゝる千鳥の積成は万代とのも

水風孝慶

銭山の名は下の香をとゝめはいつのまにかよるとも

朽之要

蓬も積は露をやとしておもふ露の雪

朱為作

心ありもをりてこそしる梅の花心をしのぶ

久しくちぎりをかはしぬるは
定てかねしき我身にしたかひ参らんかくるこゝろもかねたやすく
なさけなきにはなさけしかるへし思ひ[illegible]なく
やまひ病あらんとてこゝろ[illegible]
あるゆへこれ[illegible]のうち[illegible]のつかりて[illegible]なり[illegible]
かねて人をたのみ[illegible]のちやくの[illegible]いふまでもなし
やさしき[illegible]まゐるとき
いたしてもなしかやうのねいろをかけなかね[illegible]まゐる[illegible]
おもふかすへしるは
[illegible]

いかなる病かあらんとする[illegible]硯をね
[illegible]一筆の松ありての[illegible]
つるかをあらはして
死出の山こえゆくこゝろつきぬ[illegible]やまとの[illegible]
[illegible]人と[illegible]
[illegible]
[illegible]の心[illegible]なきて[illegible]
[illegible]
だ[illegible]なかねたものを
[illegible]死出の山こえゆく[illegible]

霊山のおほかたし事をつかいつはむこえくるまちとへたてけれはなれん
この枝にはこれしとおもふ侍るこのつかはし心のまゝ
ことてや見たねくるま宮なるてつけれ
霊山の山中にもさて祢うき宮の上さい那きりの法ね
まくてる人見　まひいなりしたくの伏算こ
思ひて霊山の山より見てる人なれ
是一のまよりもえくしゝ宮えなり御まりの心もなく
やしねりのさなりほくさうしいひもやうらん
侍ひちのまよの椙さはたるらん
法華経のつとひの宮ちのおほさらす青ねなたとなしおもへけ

申てはなくさのこつはなくまはをそへてとてをえてある
なくさはまつそ山の枝おほなくさの枝ゑとふ
牟わさの露とて人のこひるゝ
たちよもきまいつらんあらくのなへれまちあるはてらされ侍る
阿波寧ねの菊は光くえの一ゑのうてさいゝかさを
かふり露よりわと光りまるゝ
妙楽心もの根まてまゝの枝ましの玉やいつり法しきい
是一つの心もちてこゝろひるゝし仲て光のちまとも（衆生の根の）
思ひとく
心もちても倶なれは何を殊つる世をなりわのこのまれ侍し

なにはやりうたも一よりいでし心のねをおもへ
きゝけりとはいへどもうたもうけたまはりておのそうと
ならはしなうたのさ味おもしろきこゑをうつくしく
なにはなかれつゝきこえけりとてもうたうなれは心のお
ほきにいひそめたることのねもおもしろくきこえて
なにはひおもしろければ
今うたう河のなかれしきこえなにはねとあらしをたてけるのに
うたらふくはこのねをならふれば千とせものことをいひては
なにはひやうしのまくこしとうたふ
とうたふきこのねをうたはてうたれしうたのさみ線をいふ河のながれなる

うたうしふちうのうたのねは捨てよいのちをうしなひし
は水のうたや なにはひおもしろきうたにいふさ
ておもひおもきることのねをきゝわけて
ならはせる藤のふことのねをきゝて何かをおそはりものして
まうかとのうへはうたふる 加賀のくしは菊の
御事しくてをならふにつたをうけたまはりて
大和ねをたまはりおそはりのいをにのうたる心のうち
なりうたの大ところ在のうちのうちなりうたふる声
はちうくしちかひ河流河流ちうる二十年のう
なりうたのうたやうる家は庭の人は五形左右

隣のるすゝとゝかり
居士の人能出家して後さへ有つる事をいひ出して侍るのよしを

僧

ぶ能ものを派にてふ法の前にありけるらんの其らふそくり

老や

嬉しさはまくらくて老の梅門の花咲るをしらはれしくて

子

招ぬ子といはゝや書を思とはすれは歳をしらぬはおもひ来るを

孫

たらちねのあとを思ふもうれしさはまことにまさらむ

祝

よろつ世といつて御歳を君のみよはふをいふ祝ひ心のな
からまし千歳ふるの賀のかそふる時
千代をも重ねつゝ年ねて君かおもねはねはふ入のらねすまなる君まさき

旅宿五月雨

旅寝にも五月雨を宿の山路の身に旅をいのまもそれ恋ふ
住くしのかり枕の宿の初の袖をさらの恋いたらさ
くらし歳のめかれ
見きさやく木枯のおとをふきまかにて夢のやまとみうるゆめのいはねを
人の世のつゆをたのみに君の御影かゝちかよりまくのみなへ

このほとの衣のつやきよく御[illegible]り

られ候よし ねきて 御申あそはし候

あるべく御のこともうけたまはり

ねんころに[illegible] 御[illegible]ひて

ゆるしまいらせあるべく御心にて

なほ御申まいらせくれぐれ[illegible]

かう衣の文への御返事[illegible]

[illegible]これは御申あそはし候

やかて[illegible]さらて あなかしこ

あなたへもよく[illegible]

社頭にて

ねかはくはこのてきぬの神の

しことし年とつあるべきのみ

[illegible]

あくまでもおかのさかえよろこびの

[illegible] 年の[illegible]

写し[illegible]

石子をなくる時

人の人あれは銭をも石にかへても欲りしきこの身

作者半絵と云ふの弁慶のつり鐘撞かるゝ事

山寺の鐘を出すやなしたちのくいを撞き出しけり撞かるゝ

なりはさせりて切なるはやなしもとちの家のいたされ

庭へいつも銭なきてなみて

いさかにも見はてこゝろねをもしけりものくしのなかて来たり

家もこゝろを忘れ出し作れ身の青おもゆるきのふ売のな

作者は

なりは花はかほにも人心たのしかきいでこらえ者なれ

いつまこへさ様[illegible]り未のよおもてなかゝには[illegible]

想ありは水のおもり

[illegible]を云ひてなきの件云る銭と青とされ[illegible]

作者のあかなは

なりはきいねをり光てもちに石に飲る所作日本

竹のとちつく体ゝろとおもてのたくさうかくしけりこし

楊貴妃

様しまは君のは月もさの[illegible]の女の井

作者のあかなるは

何事のある力なきはこともおもひてこそまるものはつきいふさ

ゆきのふる雲のうへにはつきともに我ふしたるくもあはれ
世をのかれて後こゝろうきことにおのゝ音をきゝてこゝろ
紅葉の色を人のとひけるに
こゝろなきおもひも色その木をさそふ心の千代とこそなれ
中宗といふ人の桜の花のさかり
我の山はなをみてきて花もちらぬ木をさそふ花もし世
人のなくなりしをやもとにむかしのなれしきそのあはれ
こゝろ鏡この寄の花のこゝろなく
萩の露のこゝろを鏡とて年をへてもなかりけるかな
あはれなりしをいとひて世をすてしはつと

世しり
消えもせむおもひしをこゝろの月にかゝりし世はあはれなるの
身をいとひやつされは　たゝるをしのばれぬるゝしの
こゝろのいつしこそこしもとをしこのまこと音
田子の浦をみて
桜花のゆかりこゝろなく今年の人をのこすなる
身ここちおもひうちとわかねしこゝろ人に花はなかりけり
治承の栽樹
世をあれはきみにしたかひ桂の花もなくてやまとこそさそふ
[illegible]

大惣文庫

春ハ三潤ニとちとニ云ニ付候ニ付はせ候つちかきおしへハ

大槻文庫

弥行宿年七

寛政二年

貴合二本